

研修医のコーナー

患者さんの話を聞くということ

研修が始まって1年目が終わり、2年目も半分が終わってしまいました。1年目の時は右も左も分からず、特に最初の1カ月は上級医の先生が完璧なカルテを書いているのに、自分がカルテを書くことに何の意味があるんだろうとか、病棟業務がよく分からず、そもそも病棟に全然いかなかったりとか、ふざけた研修医でした。今日は、そんな自分が今でも印象に残っている患者さんのお話を書こうと思います。

その患者さんに会ったのは5月の中旬、自分が呼吸器ローテを回り始めたばかりのときでした。肺腫瘍の精査で入院した方で、気管支鏡での検査が難しい場所だったため経皮的生検をする予定となっていました。ただその人は1カ月前くらいに心筋梗塞を起こしてステントが入って

JCHO九州病院 島内 淳志

おり、抗血小板剤を2剤飲んでいたので、生検をするためにまず冠動脈造影をしてステント閉塞がないことを確認した後、抗血小板剤を1週間かけて単剤にして、そのあとヘパリン置換をしてから生検するという、少々大変な方でした。

その人は自分とレジの先生と主治医での3人持ちだったのですが、その生検にこぎつけるまでにいろいろなことが起こりました。たまたま会いに行ったタイミングで胸が痛いと言われ、これはいかんと心電図も取らずにニトロを飲ませたり、首が痛いと言われて上司に相談もせず整形外科にコンサルトしたり、今思えば恥ずかしいミスばかりですが、当時は患者さんのために何かできないか必死だったんでしょう。そのたびに上の先生に怒られながら、毎日話だけは

聞きに行っていました。そんなこんなでいよいよ生検の日がやってきました。これも今思えば恥ずかしいのですが、自分の担当の患者さんだというのに、その検査を見に行きませんでした(当時はそういうことすら分かっていませんでした)。しかも、2週間もかけて何とかこぎつけたにもかかわらず、腫瘍に生検針が通らず、検査自体が失敗に終わってしまったのです。そのことを病棟の看護師さんから知らされ、かなり落ち込みました。その検査を見にも行かず、しかも検査自体も失敗に終わってしまった、この2週間は何だったのかと罵倒を受けるに違いない…。びくびくしながら、患者さんに会いに行きました。しかし、「ありがとう」開口一番、患者さんはそう言ってくれたのです。「自分のこの腫瘍が何なのか、ずっと不安だった。結局診断は付かなかったけど、あんたが毎日話をただ聞いてくれ

てとても気が楽になった」と。まだ1カ月強の研修医など、診断的なことも治療的なことも何一つできません。しかしそれでもこの2週間話を聞くために会いに行ったという行為は無駄ではなかったのだということを、このとき初めて悟ったのです。

2年目になってなんとなく病棟のことができるようになってくると(実際それは錯覚だということたびたび思い知らされますが)、患者さんに対する態度がどこか1年目のときに比べてないがしろになっている自分に気づきます。そのたびに、ああ今の自分だめだなと自戒する毎日です。ただ患者さんの話を聞くということが忙しい日々の中でどうしても二の次になりがちです。研鑽を積むのはもちろんですが、こういう基本的なことを忘れずにこの仕事を続けていけるように頑張っていきたいと思います。

当たり前のことを第一に

地域医療機能推進機構(JCHO)九州病院初期研修医2年目の中村暢孝と申します。

「研修医のコーナー」にて他病院の研修医の先生や同期の投稿を読みながら、一年前の自分を振り返ってみました。去年のこの時期は血液・腫瘍・消化器内科ローテートをしていました。当院の研修プログラムでは複数科を3カ月研修することとなっており、多くの患者さんを担当させていただきましたが、疾患の知識は決して十分とはいえ、毎日悩んで失敗し、ご指導を受け、自分を省みるばかりの毎日でした。現在、救急外来をローテートしておりますが、去年経験した症例に出合った時に、わずかではあります。が落ち着いて処置や鑑別をあげることができてきたように感じております。一年と数カ月という短い月日ではありますが、その日の疑問点や反省点をきちんとフィードバックし、次に活かすという当たり前のことを第一に大切にしながら

JCHO九州病院 中村 暢孝

ら日々の診療にあたっています。また、最近では指導医の先生から後期レジデントと同じくらいの気持ちで診療にあたるようにと、ご指導をうけ、半年後には一人の専門医として業務にあたるのが現実味を帯びてきたと感じ一層引き締めて仕事に臨んでいきます。

この投稿が掲載される頃には緩和ケアのローテート中と思います。成人の半分が悪性腫瘍になると言われているこの国で、これからどの科に進むにしても終末期をよりよくすることは課せられた使命だと思います。去年は腫瘍内科で緩和ケアに移行された方々を見てきましたが、今度は他科からの患者さんの担当にもなりますので、今までに学んだ疾患の知識をもとに少しでもよりよい最後を迎えていただけるような医療の提供と、より一層の勉学に励んでいきたいと思っています。